

氏 名	渡辺 浩平
学 位 の 種 類	博士（社会学）
報 告 番 号	乙第 357 号
学位授与年月日	2021 年 9 月 19 日
学位授与の要件	学位規則(昭和 2 8 年 4 月 1 日文部省令第 9 号) 第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 題 目	アメリカ先住民ナバホ保留地における共生と共歓の民族誌的研究
審 査 委 員	(主査) 石井 香世子 (立教大学大学院社会学研究科教授) 木村 忠正 (立教大学大学院社会学研究科教授) 木村 自 (立教大学大学院社会学研究科准教授) 伊藤 敦規 (国立民族学博物館准教授) 生井 英考 (立教大学アメリカ研究所所員)

I. 論文の内容の要旨

本論文は、アメリカ合衆国アリゾナ州にあるアメリカ先住民ナバホ保留地において実施した長期にわたるフィールド調査をもとに、ナバホ社会の中心的世界観とされる「ホッジョー」概念を再考した労作である。従来の研究においてホッジョーは、おもに文化的価値の文脈から「調和」と捉えられてきた。それに対して本論文は、個人的な「生きられた経験」の文脈に即して、具体的な相互行為の過程で情動的行為により生成される「コンヴィヴィアリティ (conviviality)」として、ホッジョーを民族誌的に解釈、記述しようと試みる。

本論文は、序章、第1章から第5章、そして終章の7つの章から構成される。

序章では、本論文のナバホ研究における位置づけと理論的枠組が論じられる。既存のナバホ研究においてホッジョーという概念は、「あらゆるものとの調和」という文化的価値として捉えられてきた。これは、ホッジョーをコミュニティの社会的経験として捉え、社会統合の含みをもつ西洋的な調和の概念で解釈するものであり、近年、そうした調和概念を批判し、「生きられた経験」としてのホッジョーを論じる研究も生まれつつある。しかし後者の場合にも、ホッジョーが生成する相互行為過程の描写が不十分だといえる。

そこで、本論文は、イリイチが提起し、ギルロイらの研究により近年「共生」を論じる際の鍵概念とされるコンヴィヴィアリティに注目する。コンヴィヴィアリティを「根本的に相互依存する異質な要素が均衡した状態」と捉えることで、ナバホ社会におけるホッジョーとは、相互行為において、個人の意図に還元することのできない情動が働き、相互依存する多種多様な異質な要素の均衡が生成する実践であることを、第2章から第5章の各章において、民族誌的に丹念に記述しようとする。本論文では、そうしたコンヴィヴィアリティを実現するナバホ社会の具体的な作法が説得的に展開されていく。

第2章以降の民族誌に入る前に、第1章では、本論文の研究対象であるナバホ保留地の概況と調査研究の概要が紹介されている。筆者は、2013年から2016年にかけてナバホ保留地内のホワイト・コーン・チャプターで生計を営むナバホ家族のもとに滞在し、セイリ・ウィートフィールド・チャプターでの留学経験も踏まえながら、ともに生活したナバホの人々の思考様式や価値体系、感情の所在・変化とコミュニケーションの在り様に関して、参与観察に加えてフォーマル・インフォーマル双方のインタビューを実施した。

第2章では、車に相乗りするような場面で、相手に直接依頼するのではなく、相手が出かける機会に便乗する形をとろうとしたり、出かけることを知って同乗する目的を見つけ出し、同乗したり、誰かの目的に自身の目的をつけ足すことで目的の遂行が互いに依存する状況を生み出そうとする相互行為が丁寧に描かれる。人々の日常生活の中で、異なる目的を持つ個々人が、自分の意図を相手に押し付ける形にしないようにしながら、協同行為を生み出す作法が、ナバホ社会に深く組み込まれている様子が活写される。

第3章では、そうした人々が日常生活のなかでトラブルに直面した際に、上下関係を生み出す謝罪を避けて、水平的な関係を維持するためにあえて「距離を取る」作法が、ナバホ社会におけるコンヴィヴィアリティ実践のための作法であることが論じられる。

第4章では、アメリカ先住民教会の催事ペヨーテ・ミーティングにおける参与観察から、ナバホの間にみられる笑いが持つ癒しの機能を分析する。ペヨーテは、幻覚剤を含むサボテンの一種で、ナバホの人々にとっては、「精霊とコミュニケーションする」ための呪薬である。ペヨーテ・ミーティングは、多様な苦悩に直面して損なわれたホッジョーの回復を目的とし、一晚を通じて実施される儀礼と共食をおもな構成要素とした催事である。このペヨーテ・ミーティングの場では、儀式においても共食においても、ジョーク、ユーモアと笑いが重要な意味を持っている。その笑いによって、癒しが提供され、病をめぐる苦悩の軽減と、レジリエンスの効果がもたらされるという。そして人々は、このユーモアと笑いによって、苦悩との間でホッジョーが成立すると再帰的に概念化する。つまり、苦悩する個人は、ミーティング参加者たちとの相互依存性のなかで、ともに笑うことにより、情動的なつながりを感じ、そのつながりのもとでホッジョーが生み出されて新たな自己構築が行われるのである。本論文は、こうした相互行為を、笑いを介したコンヴィヴィアリティの実践として解釈する。

第5章では、この「笑い」という行為を通じた、ナバホの人々にとってのホッジョーの回復、共飲の生成に着目する。初対面の場面や、もめごとがあった後など、潜在的な敵対関係が感じられる場面では笑いが重要とされ、愉しみ、歓びを共有することで、コンヴィヴィアリティが生成する事例が語られる。つまり、ナバホの人々にとっての笑いとは、望ましいとされる人間の関係性を表現し、ホッジョーを具現化する行為であり、「おかしいから笑う」という意味付けに還元しえない社会的行為なのである。本章ではさらに、親族の共食や儀礼後の共食などの集まりの場面における笑いを事例として、エスノメソドロジックの会話分析も含めながら、「共飲」を求め、「共飲」を生み出す人々の相互行為を丹念に描写している。

以上のようなフィールド調査結果の分析を通じて終章では、ホッジョーを、ナバホの人々のあいだで共有され、思考や感情を飼いならしつつ、根本的な相互依存性のもとで、人間・非人間すべてを含む他者との望ましい繋がりを維持しようとする実践的作法であると総括する。ホッジョーとは単に「調和」という文化的価値でも、個人の身体に閉じられた思考や感情でもなく、他者や現実を変容させる「力」を持つものであり、西洋的な個人とは異なる相互依存性のもとで実現するコンヴィヴィアリティなのである。

Ⅱ．論文審査の結果の要旨

本論文は、ナバホ研究、共生研究、相互行為研究それぞれの領域において、優れた独自性をもっている。まず、ナバホ研究においては、ナバホ文化における鍵概念の一つであるホッジョーについて、文化的価値としての意味論から脱し、社会的相互行為における「生きられた経験」「情動的行為」として生成する様態を、丁寧な民族誌的記述により明らかにしたことが評価される。なお本論文は、ナバホ政府調査倫理委員会によって成果公刊の承認を受ける、おそらく最初の日本語による博士論文であり（ナバホ政府による承認の際には、筆者が用意した英語翻訳版を用いた）、その民族誌的意義のみならず日本におけるナバホ研究の展開という面からも、高く評価することができる。

また共生研究としては、コンヴィヴィアリティという概念が、抽象的な理念、規範的モデルとして議論される傾向をもつ共生研究において、長期にわたるフィールドリサーチにもとづき、人々のミクロな相互行為、言語行為の情動性への丹念な分析を通じて、コンヴィヴィアリティが実践的に立ち現れる様相を活写していることも、独自の貢献と考えることができる。

本論文は、ナバホ社会における人々の相互行為において、根源的に相互依存する異質な要素の均衡を求める情動の働きこそが、ナバホにおけるホッジョーの基底にあることを明らかにする。そして、ホッジョーとは、コンヴィヴィアリティという普遍的な相互関係の在り方が、ナバホ社会で実践される作法であるという主張、および情動に動機づけられた言語化されがたい人々の相互行為とホッジョー生成の立ち現れを、丹念に記述する民族誌的アプローチ（「情動的に記述する」）の独自性について、審査委員会では高い評価が与えられた。

他方、人類学における相互行為研究の見地からは、前半のコンヴィヴィアリティ概念をめぐる論点整理と後半における事例分析との接合性がなお一層求められることが指摘された。また本博士論文中におけるコンヴィヴィアリティ概念の定義について、論述箇所による揺らぎがみられ、より整合性の高い用法が求められることが指摘された。さらに、民族誌研究としての見地からは、現代ナバホの民族誌として通用性の高いものとするために、調査対象となった人々の社会的位置づけをより明確に行う必要があること、またナバホの現代性と社会的背景に即した分析視座をより深める必要があることが指摘された。ただしこれらは、今後の研究展開可能性として指摘されたものであり、本論文が博士論文として十分な高い水準にあることを審査委員全員が確認した。